

【業務の明確化と役割分担】業務負担の可視化とICT活用

成果

業務の質の向上

センサー通知を活用し、モーニングケア、夕食後の入居者の居室移動をする際に繰り返し訪室が少なくなり業務の流れが良くなった。

量的な効率化

可視化が進んだことで転倒事故は減少したが、その時間帯の駆付けに要する歩数は上昇した。今後はいかに効率的に画像から駆付け判断を出来るようになるか事例共有をすすめる。

課題

ICT活用によりケアの標準化、職員の負担軽減を図りたいが、課題の定量化が出来ておらずICT化した際に具体的にどの業務に有効活用すべきか不明瞭であった。課題の定量化を行い、施設として効果的な活用方法を策定していく狙いがあった。

解決の仕方

- ・既存業務の課題を定量化
コンサルテーションにより、スタッフの歩数や業務割合を見える化し、負担となっている業務を明確にした。
- ・運用方針の仮策定
稼働前にリーダークラスを中心に通知種に対するON/OFF設定の設定基準や、画像センサを確認した後の駆付け基準について策定し、仮策定した運用方針に則りまずは運用を進め、課題がないか確認する。
- ・運用方針の本策定
通知設定、駆付け設定について現時点での運用ルールを施設内に張り出し共有化する。また、ルール変更については支配人も含め数か月に1度は施設内会議で議題にあげ課題がないか確認するといった運用体制とした。

～導入前後の職員歩数～



【手順書の作成】ICTセンサー運用のマニュアル作成による訪室ケアの標準化

成果

業務の質の向上

都度訪室する必要がなく、かつ通知設定や訪室基準を定める事で、転倒リスクを軽減しつつも職員が無理なく駆けつけ業務をする事が出来るようになった。
駆けつけ基準を設ける事で、センサー起点による訪室の要否判断が職員間でのバラつきが少なくなった。

量的な効率化

新規センサーを適切な運用方針を定める事で3名⇒16名まで起床離床行動の見守りする事ができた
職員が少なく利用者の動きが多いモーニングケア時間帯の転倒件数が減少した

課題

既存の光センサーは転倒リスクの高い入居者に利用していたが、センサー要否の見直し等について基準がなく、センサー使用する利用者の選定に悩む事があった。さらに、これまで2, 3台だったセンサーが、センサー変更に伴い全部屋に設置されるため、センサーの各通知項目に対するON/OFF設定について運用マニュアルを作成する必要があった。

解決の仕方

・既存センサーの運用課題を整理設置台数、適用基準、職員ヒアリングから、既存センサーの運用に対する課題を明確にする。

・研修による新規センサーの機能/運用の理解：稼働前に、メーカーによる操作研修を介護スタッフ全員、運用研修をリーダークラスが受講し機能や運用について理解する。

・運用方針の仮策定：稼働前にリーダークラスを中心に通知種に対するON/OFF設定の設定基準や、画像センサを確認した後の駆け付け基準について策定した。

・運用確認、課題抽出：センサー稼働に伴い、仮策定した運用方針に則りまずは運用を進め、課題がないか確認した。

・運用方針の本策定：ADLを中心とした入居者のアセスメント情報を元に、どのような通知設定にするかの方針を策定した。

～通知/訪室ルール書～

通知種			通知設定方針	駆け付け基準
起床	離床	転倒		
ON	ON	ON	■全通知ON■ 転倒リスクが大きい、又は徘徊対応が必要な方など行動起点から積極的な関わりが必要な方	「起床通知」時 変返り等でなければ「駆け付け」 静止画で判断できない場合のみLIVE確認
OFF	ON	ON	■離床、転倒通知のみON■ 立ち上がりは安定しているが移乗介助など一部介助が必要で転倒リスクが高いため、離床後の行動を確認したい方	「離床通知」時 “駆け付け” LIVE確認推奨
ON	OFF	ON	■起床、転倒通知のみON■ 移乗全介助のため、起床を確認したい方。 ずり落ち可能性がある方	「起床通知」時 変返り等でなければ「駆け付け」
ON	OFF	OFF	■起床通知のみONの方 ご自分の起居動作は難しくベッドから離れる事はないが、端座位などの動作は出来るため確認したい方	「起床通知」時 変返り等でなければ「駆け付け」 LIVE確認推奨
OFF	OFF	ON	■転倒通知のみON■ 転倒リスクが小さく、移乗動作が自立している方 移乗動作は全介助だが、ずり落ちなどの転倒リスクがある方	各通知画像を見て異常なければ行かない LIVE確認推奨
OFF	ON	OFF	■離床のみON■ 転倒リスクは少ないが、認知症症状など動き出しを確認したい方	各通知画像を見て異常なければ行かない LIVE確認推奨
OFF	OFF	OFF	■全通知OFF■ 全自立している方、又は全介助（ベッドから動かない）の方	各通知画像を見て異常なければ行かない LIVE確認推奨

【業務の明確化と役割分担】睡眠状態の把握によるケア適正とADLの維持・改善

成果

業務の質の向上

量的な効率化

ご利用開始時には夜間はよく寝られず、日中横臥時間が長くなっていた利用者が、落ち着かれるにつれて夜間睡眠が深くなり、日中横臥時間が減ったことが確認できた。

睡眠状態の把握からその後のケア方針へ活用ができるようになった。また、ケアの効果が確認できたことで納得感のあるケアを実行できるようになった。

夜間の良眠化に繋がる事で、夜勤職員の負担が減った

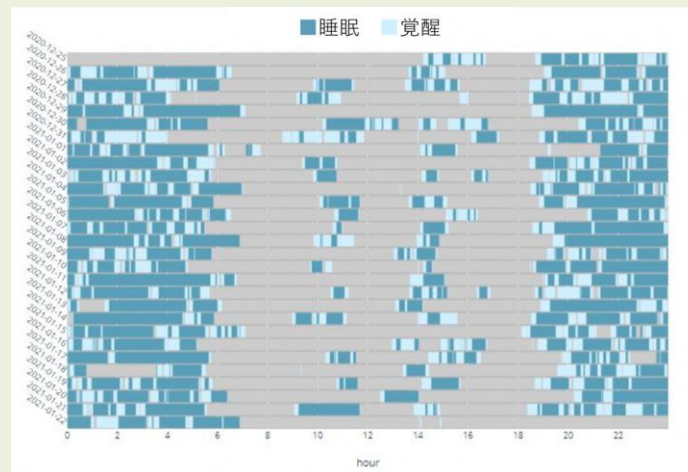
課題

利用者の夜間のお休みの様子が訪室時しかわからなかった。そのため、客観的なデータに基づいたケア方針が作成できなかった。ご家族にも夜間の状態はよく聞かれるが、説明に使えるデータが無かった。

解決の仕方

- ・睡眠状態を表示するシステムを導入し、利用方法の講習を受ける。
- ・研修による睡眠指標の読み方の講習を受ける。
- ・睡眠状態の把握日中・夜間の睡眠状態を把握する。
- ・課題の特定とケアの最適化：日中/夜間の睡眠状態にみられる課題を特定する。
- ・睡眠状態の変化を評価し、ケアにフィードバックする。

～睡眠状態データ～



【記録・報告様式の工夫】記録業務の効率化

成果

業務の質の向上

ワーク基準で記録項目を職員間で確認/議論した事で記録に対する職員の意識が向上した

量的な効率化

一部項目はモバイル記録で工数が抑制出来る事を確認できた。

課題

記録様式が全て紙入力であったため、記入に時間を要する、転記作業が多い、業務の区切りがつくまで記録が出来ない、等の理由から記録の質（抜け漏れ）、工数（業務負担）共に課題になっていた。

解決の仕方

- ・運用課題を整理記録に要する時間、項目等を洗い出し、現状の課題を整理した。
- ・研修による記録システムの機能/運用の理解：メーカーによる操作研修を介護スタッフ全員、運用研修をリーダークラスが受講し機能や運用について理解した。
- ・運用方針の仮策定：稼働前にリーダークラスを中心にモバイルによる記録と、PCによる記録の項目について確認し、電子記録への項目を移行するかの計画を立てた。
- ・運用方針の本策定：家族報告と記録項目が連動しているが、電子化出来る項目で一部対応できない項目があった。記録項目をカスタマイズ出来るか、家族報告のフォーマットを変更するかメーカー/職員と協議しつつ、移行期間を延長する事にした。

～記録時間の評価シート～

項目	入力媒体				転記先媒体				利用者全員分を記載するに要する時間 (測定対象フロア内)
	紙の記録表	PC	タブレット	携帯端末	紙の記録表	PC	タブレット	携帯端末	
食事	✓				✓				15分
排泄	✓				✓				5分
服薬	✓				✓				15-20分
水分	✓				✓				5-10分
バイタル	✓				✓				10分
生活様子	✓				✓				10分(1時間ごと)
申し送り	✓				✓				10-15分
ヒヤリハット	✓				✓				1件あたり 30分
事故報告	✓				✓				1件あたり 60分
その他(絆創膏)	✓								10分
その他(広みず代)	✓								20分